

アクティブシニアで 地方創生

雇用を創出し、多世代に貢献する
「日本版CCRC」とは

聞き手・編集部（大隅 元）



まつだともお
松田智生

（三菱総合研究所 プラチナ社会研究センター主席研究員）

1966年、東京都生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。2010年より、CCRCの有望性を提唱し、産官学のアドバイザーを数多く務める。15年より高知大学客員教授を兼務。共著に『Phronesis10 シニアが輝く日本の未来』（丸善プラネット）、『3万人調査で読み解く日本の生活者市場』（日本経済新聞出版社）など。新著は『日本版CCRCがわかる本』（法研）。

生を送り、健康寿命を可能なかぎり伸ばすとともに、要介護状態になっても継続的な医療・介護サービスが受けられる点も特徴の一つである。

CCRC発祥の地であるアメリカでは約二〇〇〇カ所のコミュニティがあり、計七〇万人ほどが居住している。市場規模はじつに約三兆円。CCRCで見られるのは、担い手となり生きがいをもって暮らす元気な高齢者（アクティブシニア）の姿である。

現在、わが国でも「日本版CCRC」を根付かせるべく、国や地方で議論が進められている。政府は一昨年、「日本版CCRC構想有識者会議」（座長・増田寛也元総

大都市に住む高齢者が住み替え、地域貢献や生涯学習をしながら健康時から介護時まで安心して暮らせる住宅コミュニティ「日本版CCRC（Continuing Care Retirement Community）」が注目されている。元気なうちに多世代が集うコミュニティに参加して充実した人

務相)を設置。全国で約二三〇の地方自治体が、推進意向を示している。同会議委員の主要メンバーである松田智生氏に、「日本版CCRC」構想の展望と課題を聞いた。

「人生二期作」と「人生二毛作」

——「日本版CCRC」は、アクティブシニアの住み替えだけでなく、地域住民と交流しながら健康的で自立した生活を送り、医療や介護の安心が備わった地域づくりをめざすといわれています。そもそもアクティブシニアとは、どういう人のことを指すのでしょうか。

松田 アクティブシニアとは「WILL(やりたいこと)」と「CAN(できること)」が明らかにになっている人たちといえるでしょう。

たとえば仕事一筋の人が、リタイアした途端に無気力状態になってしまうことは多々あります。また、組織で細分化された一部の専門性しかないにもかかわらず、仕事全般をマスターしていると勘違いしている人もいます。つまり「自分は何がしたくて、何ができるのか」をわかっているシニアは意外に多いのです。大企業の役員や部長だった人でも、いざリタイアしたら自分のWILL

やCANが何一つ発見できないという事態になってしまう。

そうならないように、「やりたいこと」「できること」を明確に描けるのがアクティブシニアになるということ

です。

アクティブシニアのもう一つのキーワードは、「きょうよう」「きょういく」です。つまり「今日用」「今日用事がある」と「今日行く」「今日行く場所がある」ことです。たとえば早起きして農園に通い、日中は大学で栄養学を学び、地元の特産品の販路拡大を話し合う。夜はホスト・ファミリーの留学生と食事をし、ジャズバーで音楽仲間と談笑。こんな一日も夢ではありません。

——羨ましいほど充実した生活ですが、実際こうした暮らしを行なうアクティブシニアは存在するのでしょうか。

松田 たとえば大手出版社に勤めていた方で、リタイア後、高知市に移住した例があります。漫画『釣りバカ日誌』(小学館)の初代編集担当で、主人公「ハマちゃん」のモデルで大の釣り好き。高知で釣り三昧の日々を楽しみながら、編集者だった経験を活かして農業や観光や移住のアドバイザーとして活躍中です。現役時代の強

みを存分に発揮した「人生二期作」ですね。さらに、最近が高知大学の特任教授となり、新たなキャリアの「人生二毛作」も始めています。

リタイアしたシニアにとって寂しいのが、交わす名刺が無くなることだそうです。その意味では、大学の特任教授の名刺があるのは嬉しいことだと思います。

「いまが人生でいちばん幸せ」

——首都圏勤務だった人が、急に地方に移住するのはハードルが高いようにも思えますが。

松田 この高知移住の方には、「田舎暮らし」はすぐに飽きてしまうそうです。地方の中心市街地なら、病院や学校、お洒落なバーやイタリアンだけでなく、赤ちょうちんやスナックも充実しています（笑）。

もう一人の例は、早期退職制度でリタイアして佐世保市（長崎県）に移住した大手ビル会社の役員。この方は長崎支社長を四年半務め、「第二の故郷でもある長崎に恩返しをしたい」と移住を決めました。学生時代に六大学野球で活躍していた腕前を活かし、大学野球部のコーチを務めています。彼のケースも「人生二毛作」モデルですね。

企業戦士時代は、大企業の「鎧^{よろい}」を身に付けているような厳しいイメージでしたが、現在は真っ黒に日焼けした顔でマイルドな印象で、「いまが人生でいちばん幸せ」だそうです。

この方は移住した際、地元の人から「お帰りなさい」といわれたのが何より嬉しかったそうです。たしかに知らない土地より、知人がいて思い入れのある場所のほうがよいでしょう。彼のような「転勤族の恩返し型」も、C R Cの理想的な人たちといえます。

——説明を聞いているだけで、元気で明るい高齢者の姿をイメージできます。彼らは普段、何をモチベーションの源泉としているのでしょうか。

松田 アクティブシニアは、貢献欲求と承認欲求が満たされています。誰かに貢献している、誰かに承認されているという実感は、生きるための原動力になります。

さらに、自分と違う世代を含めた他者との「深い話し合い」も、モチベーションの大きな要素なのです。地域の未来について住民と真剣に議論するような「青臭い議論」が、心の健康に繋がっていくのでしょうか。

——アクティブシニアは現在、高齢者のおよそ何割が該当しますか。

松田 個人的な感覚ですが、「二…六…二の法則」でいう上位二割の方が「アクティブ層」で、一方、下位二割は、病気や介護の「対処層」。中間の六割を占めるシニアは、何かを始めたいと思っっているけれど、一步を踏み出せない「潜在アクティブ層」です。

『Voice』の読者にも、老後の生き方や趣味の本を読んでみたものの「実際、どう始めたらいいかわからない」という方がいるかもしれない。その一步を踏み出すための仕組みが、CCRCの暮らしにありそうです。日本版CCRCは、この六割の中間層を将来、対処層に向かわせず、アクティブ層に移行させる「対処から予防」の一助になると考えています。

夫婦の「ほどよい距離感」が保たれる

——六割の中間層をアクティブ層に引き上げるために、日本版CCRCにどんな仕組みが求められますか。

松田 必要なのは、一定のインセンティブ（報奨）と少しの強制力、つまり「アメとムチ」でしょう。たとえば、CCRCで五十時間働けば、その時間は将来の自分の介護に使える、あるいはその時間を地域通貨として使えるようなアイデアです。

あるいは「第二義務教育」は、五十歳や六十歳になったら再び学校に通うアイデアです。学校で地域の歴史や課題を学び、体育の時間は転倒防止運動をします。そこで幼馴染みと再会したり、新たな友人ができるでしょう。単身同士で恋が芽生えるかもしれません。給食も提供されれば、独居老人の食事は助かります。こうしたシニアの背中を後押しする制度設計が必要でしょう。

——そういえば、退職後に夫婦で過ごす時間が長くなると、奥さんの家事の負担が増し、夫婦間にストレスが増えることをよく聞きます。CCRCに住めば、食事や洗濯といった家事の負担は軽減されますね。

松田 集って住む「集住」という暮らしは、主婦の家事の軽減だけでなく、男同士でゴルフに行き、女同士でフラダンスをして、食事は気の合う夫婦同士と一緒にというように、「ほどよい距離感」が保たれます。

妻は首都圏に残り、夫が地方に単身移住するというケースもあります。私は「ハッピー別居」と呼びますが、彼らに話を聞くと、「以前より関係が良好になった」という。SNSで密に近況報告を行ない、久しぶりに自宅に帰り、妻のつくる味噌汁のおいしさに気付いたという男性もいましたよ。

年賀状に書きたくなくなるような暮らし方

——現在、地方創生の主要政策として、すでに全国で約三三〇の地方自治体が日本版CCRCの推進意向を示しています。ところがCCRCの案は議論されても、なかなか実現段階に至らないのはなぜでしょうか。

松田 CCRCへの誤解や先人観がまだ多いことです。これは主語の問題です。たとえば「首都圏の介護が大変だから地方のCCRCに移住」といえば、地方は「姥捨て山か」と面白くないし、シニアも積極的な住み替えの動機にはならないでしょう。しかし、主語を「私が輝くためにセカンドライフはどうあるべきか」「わが街が輝くためにアクティブシニアとどう連携するか」というように、私主語、わが街主語にすれば、前向きな議論になります。つまりCCRCは、私たち自身の「これから」の物語なのです。それには「ワクワク感」を示すことです。

リタイア後、シニアが寂しいのは年賀状に書くことが無くなることだそうです。そして男性は老後の年賀状というとなぜか「そば打ち」に走る傾向があるのですが、そば打ちだけでは非常にもったいない。CCRCの近隣

の大学で好きな幕末の歴史を学び、学生のキャリアアドバイザーをして、地元の特産品の販路開拓に汗を流す。そんな年賀状に書きたくなくなるような暮らし方を示すことではないでしょうか。日本版CCRCは地方にハコモノをつくることではないのです。

——「ワクワク感」を感じるCCRCというのは、具体的にどんなイメージでしょうか？

松田 たとえば好きな美術館や博物館の近くにCCRCをつくる「美術館・芸術連携型」や、好きなプロ野球チームのファン同士が住む「プロ野球連携型」。宝塚ファンが集うモデルやテーマパークの近くで家族三世代が楽しめるモデルもあるでしょう。

また、「企業城下町連携型」は、豊田をはじめ日立や釜石、長崎などの企業城下町でのモデルです。今後、団塊世代以降のリタイアにより、企業城下町の衰退が懸念されます。そこで地元に着をもつ企業OB・OGの移住を募り、企業城下町の施設、人材、情報をフル活用して、新たな街づくりに挑んでもらうのです。

一方、「シングルマザー連携型」は、CCRCで彼女たちに向けた雇用をつくり、さらに居住者の家賃の一部が彼女たちの子供の奨学金になるアイデアです。最近

上梓した『日本版CCRCがわかる本』（法研）では、「こんな日本版CCRCなら住んでみたい！」という六分野三〇のワクワクするCCRCモデルを示しています。——ちなみに、CCRCに適した場所や条件はありません。

松田 CCRCの特長は、あらゆる立地で成立するという点にあります。いままでの話の流れでは地方限定で論じられがちですが、都市部や首都圏から近い郊外でも機能する仕組みです。地方移住ありきではないのです。

——移住者のライフスタイルに合わせた多種多様なCCRCが生まれれば、家族にとっても選択の幅が広がりますね。

松田 たとえば地方で暮らすシニア夫婦が、息子夫婦の住む首都圏に移り住めば、孫と一緒に過ごせる時間が増えます。また、積雪地域の雪かきの苦勞もないですし、戸建てと比べてCCRCのほうが掃除や食事など家事負担が減ります。

もちろんCCRCは要介護状態になる前に、元氣なうちに入居することが前提です。とはいえ、加齢とともに身体の衰えは避けられません。

CCRCで必須なのは、「カラダの安心」「オカネの安

心」「ココロの安心」の三つです。具体的には、健康支援や予防医療の提供、介護状態になっても継続的なケアを受けられること。米国のCCRCは原則、介護になっても家賃が変わりません。それがオカネの安心です。しかし現在の日本の高齢者住宅は、介護度が上がると費用がかさみます。ココロの安心は、そこで友人ができ、生きがいが見つかることです。

いま、私が危惧するのは、劣悪な「なんちゃって・CCRC」の粗製乱造です。アメリカでCCRCの認証規格制度があるように、日本でもISO（国際標準化機構）のようにCCRCの認証規格は必須でしょう。こうした認証や格付けが普及すれば、消費者保護になるとともに、事業主体が投資家や金融機関から資金調達することにも貢献します。規制緩和だけでなく、良い意味での規制や認証制度も、CCRCの健全な市場創出のために必要だと思えます。

——各自自治体が構想を練っても、なかなか事業主体が現れないという課題もあります。

松田 それがいま直面する最大の課題でしょう。CCRCの事業主体は、民間企業や医療法人、社会福祉法人が中心になりますが、有望と思いつつも、まったく新た

なビジネスであるがゆえに、一歩踏み出せないのです。彼らの事業参入意欲を高めるために、規制緩和や、補助や減税などの政策、制度設計が必須です。たとえば、共用部の建設費の補助や容積率への非算入、あるいは居住者の介護度が改善された場合には、奨励金や減税があるような健康インセンティブです。

また、事業者主体の単独型でなく、地元の病院に大手企業が出資してリスクを軽減する共同方式も考えるべきでしょう。

民・公・産・学の「四方一両得」のシステム

—— C C R Cの実現に向けて、国や自治体がより能動的に取り組むための方策はありますか？

松田 ユーザー視点です。つまり、実際に輝くアクテ
イブシニアをロールモデルとして紹介することです。先
ほど挙げた理想的なリタイア例のように、シニアの「ヒ
ーロー」や「ヒロイン」がテレビやネットで注目を集め
れば、日本におよそ六六〇万人いる団塊世代のシニア
が、新たな住まい方や暮らし方を考えて、市場を広げて
いくでしょう。

—— おっしゃるように、「自分の知識や経験を誰かに

伝えたい」「誰かの役に立ちたい」と願うシニアは少な
くないと思います。

松田 アメリカの C C R Cでは、投資銀行やエネルギー
ー関連企業で働いていた人が教壇に立ち、大学教授のよ
うに国際金融やエネルギー問題を教えています。日本で
も、積極的に経験やスキルを若い世代に教えるシニアが
増えれば、間違いなく社会にプラスでしょう。それはな
にも成功者だけでなく、バブルやリーマン・ショックで
失敗した「しくじり先生」でも参考になるはずです。

先日、移住や C C R Cに関心をもつシニアや現役世代
を連れて徳之島（鹿児島県）に赴き、地元の高校生たち
とキャリア勉強会をしました。たとえば元 C A（客室乗
務員）ならホスピタリティの極意、建築家はデザインの
重要性というように、各々の「働く論」を話すのです。
また、ある方は自分の会社の破綻という稀有な実体験を
リアルに語っていて、真剣に耳を傾ける学生の姿がとて
も印象的でした。

感想を聞くと、自身のキャリアや人生経験を説明する
ことの難しさを感じながらも、自分の話に目を輝かせる
島の子供たちと接して、彼らの将来に何か役立つことが
できるのでないか、と感じていたようです。



徳之島(鹿児島県)の高校生に向けて行なわれたキャリア教育(写真提供:丸の内プラチナ大学)



——シニアが地方の担い手になることで、承認欲求や貢献欲求が満たされるといふ好モデルですね。

最後に、日本版CCRCは将来、地方創生に何をもたらずでしょうか。

松田 シニアの新たなライフスタイルと多世代が輝く健康な街づくりです。めざすべき社会とは、高齢者のみだけの社会ではなく、多世代のための成熟した社会です。そして移住者のためだけではなく、いまの市民のためでもあります。若者が地元から出て行く、あるいは地元に戻らない理由は、雇用がないからです。CCRCは、新たな雇用を創出し、多世代に貢献するものです。

健康寿命が延びれば、医療費や介護費も抑制可能です。産業面では、健康に関連した新産業が創出され、そこに大学の生涯学習や研究機能が加わることで、民・公・産・学の「四方一両得」のシステムが完成します。

その意味で、CCRCは地方創生の切り札になりえます。ただし、政策が事業として成立するためには今後一、二年が正念場になるでしょう。私たちが将来住みたくなるようなモデルは何かという「ユーザー視点」で議論を進めていくことが、魅力ある日本版CCRCを創出するはずで。